

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	幕末の朝鮮観に関する一考察：吉田松陰を中心として
Author(s)	金, 光男
Citation	茨城大学人文学部紀要. 社会科学論集(54): 29-47
Issue Date	2012-09-28
URL	http://hdl.handle.net/10109/3319
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

幕末の朝鮮観に関する一考察

—吉田松陰を中心として—

A Reflection on the Japanese patriot's view on Korea
in Late Tokugawa Era — with special attention to Yoshida Shouin —

金 光 男

抄録

本論文は吉田松陰を通じて幕末教養人の朝鮮観を考える論考である。いわゆる教養人の朝鮮観は遅くとも徳川幕府発足から形成され継承されてきた。吉田松陰の朝鮮観もその思想的伏流の延長線上にあるものと言えよう。松陰は当時の幕藩体制に迫りくる内憂外患に対処するため二方向から接近した。すなわち攘夷と尊王である。松陰の攘夷策は、日本が強兵を養い積極的に朝鮮・アジアへ打って出る雄略によって列強の干渉を防ぐというものだった。さらに松陰の尊王は、継承された神話的物語に依る「日本優越・朝鮮蔑視」観を内包する国体論であった。これこそが松陰が継承した伝統的な朝鮮観に他ならない。すなわち日本書紀による国体の言説そのものがこの朝鮮観を不可欠な構成要素としているからだ。かくして歴史的に継承された国体論は、「中華日本」の外夷に位置すると想定した蝦夷・琉球・朝鮮を服属させる万世一系の天皇の絶対支配下に国民を統合し内憂を解消し、朝鮮・アジアを侵略して外患を防ぐという富国強兵政策を思想的に支えたものであった。

目次

1. はじめに
2. 吉田松陰の生きた時代
3. 朝鮮観の「歴史的継承」と吉田松陰
4. 吉田松陰の朝鮮観：「状況対処」から
5. おわりに

1. はじめに

本論文は、徳川幕府時代末期において、のちの王政復古の時代を切り開いていった人々の朝鮮観を、吉田松陰の議論を詳しく見ていくことによって考察する。安政期、欧米列強との和親条約および修好通商条約によって開国を迫られていった政治的状况のもとで、多くの思想家、学者、志士、幕藩政治指導者たちが、あらたな事態に対処するため様々な方

策や戦略を模索していた。そうした議論の中で、彼らは隣国朝鮮をどの様に見ており、考えていたのだろうか。この点を吉田松陰という人物の議論を中心に考察していきたい。

ではなぜ吉田松陰を考察の対象として取りあげたのか。それはつぎの様な理由による。吉田松陰は、日本の国民統合による近代化への道筋を示した先覚者として高く評価されており、また明治維新を推進した人材を多く輩出した偉大なる教育者として注目されてきた。「松下村塾」は、幕末から王政復古の変革期およびその後の維新时期を推し進めた各界各層の指導的人物を多く輩出している。彼らは政治家、官僚、軍人、教育者として明治日本をリードした人々であった。吉田松陰の後世に与えた影響は決して小さくはない [田中彰、1991、p.74、82；海原、pp. 219-245]。だからこそ明治期から昭和期を経て現在に至るまで、松陰は人々の関心を集めてきたので

あろう〔徳富；渡辺；海原；桐原〕。

しかも吉田松陰の名は現代日本の庶民にとっても大きな知名度を持っているようだ。ある日本思想史家によれば、「もし日本史上の人物について人気投票が行われるなら、松陰は最高点を争うものとなるであろう。少なくとも、松陰が『吾師』と呼んで最高の尊敬を捧げた佐久間象山の五倍は得票する、、、〈略〉、、、まことに松陰は右からも左からも高い人気を得ている。右翼は彼の『尊王攘夷』のナショナリズムに共感し、左翼は彼の変革への情熱に敬意を惜しまない。それ以外の人々も又松陰の純真さに愛着と同情を示さずにおれない」〔藤田省三、pp. 86-87〕と言う。

ところが日本国内における吉田松陰の絶大な人気にもかかわらず、彼の積極的な「海外雄略論」について、わずかの例〔吉野、1988；2002〕を除いて本格的な議論はあまり行われてこなかったように思われる。あるいは、そもそも吉田松陰はアジアに対して「侵略的」ではなく、「アジア諸国は日本と利害を共にするという意識」から「平等互惠の関係に基づく対欧米列強汎アジア連合」だったと解釈する論文もある〔栗田、1984〕。さらに、基本的には吉田松陰の思想は「アジア侵略論」ではなくて、強烈な「統一国家」を志向する「祖国愛」があるのみだとする著作〔奈良本、1951〕や、戦略論的な視点から西欧の「普遍を装う近代」や「中華文明の普遍主義」と闘った兵学者として一定の評価をする論文もある〔森田、2004〕。このようにいわば国民の人気を集めた吉田松陰のアジア・朝鮮観をめぐる評価は様々である。歴史的人物を一面的に捉えることは控えなければならないが、ある一面を欠落させたままの見方も説得性に欠けるものとならざるを得ないだろう。

思うに、吉田松陰は当時長州きっての教養人であり、驚くべき読書家であり、しかも沢山の弟子を抱え後世に影響を与えた稀有の人

物であることは間違いないだろう。彼は、朱子学などの儒学書、兵学書や「日本書紀」をはじめとする歴史書、国学・洋学・水戸学など実に様々な「先行知識」を学び吸収し、集約した一人の典型的な人物であると考えられる。この吉田松陰の一面でありながらも、後代の朝鮮や日本にとって重要な意味を持ったと考えられる彼の朝鮮観に着目して議論を展開したい。

そこで、本論を以下の二つの点において整理し議論を進める。第一に、「2」で吉田松陰の生きた社会状況や国際環境を概観した上で、「3」において吉田松陰の朝鮮観を形成するに至るまでの歴史的継承と展開を考察する。第二に、吉田松陰の朝鮮観を新たに生じた政治的状況への対応に伴って形成されていく側面を「4」で考察する。その上で、結論部分の「5」において、吉田松陰の朝鮮観を「歴史的継承」と「状況対処」という二点を関連づけて考察することを試みる。

2. 吉田松陰の生きた時代

吉田松陰は天保1（1830）年に長州藩萩で禄高二十六石の藩士杉百合之助の二男として生まれた。松陰5才の天保5（1834）年に吉田家へ養子入りし家督を継いだ。吉田家は代々山鹿流兵学の師範として仕える家柄であり、松陰は幼時から父や叔父のスパルタ教育を受けた。彼は幼少の頃から山鹿流や長沼流兵学、西洋陣法、儒学などを学び、成長して九州や関東、東北をめぐる山鹿素水、佐久間象山、会沢正志斎、梅田雲浜らと出会い様々な学問を身につけていった。〔海原、1990；久保田、1971〕

ところで彼の生まれた天保期（1830-43）は、全国的に飢饉が蔓延し多数の餓死者や疫病による死者を出した。幕府や諸藩の財政は悪化し、深刻な社会不安のなかで、都市や農

村各地で打ち壊しや農民一揆が発生し、幕藩体制の諸矛盾が噴出した時代であった。大坂では幕吏、大塩平八郎の反乱事件（天保8年）が起った。

長州藩は逼迫した藩財政を立て直すため、産物会所を設置して薬種・綿を除いた商業活動を藩の統制下においた。この「会所に連なる特権豪農商は、その特権を利用して不当な行為にでるものもあった。かくして、農民的商品経済は産物会所を中心として領主統制の下におかれ始め、農民の利益は領主制の収奪するところとなった」[田中彰、1965、p.65]。

長州でもこの時期に多くの一揆が発生している。「長州藩の場合、（一揆の；引用者）ピークは次の二つの時期に見出される。すなわち（1）一六九三～一七二二年＝元禄・享保期、（2）一八一三～一八四二年＝化政・天保期」であり、「長州藩においても元禄・享保期を画期として幕藩体制の矛盾がしだいに表出し、以後寛保・宝暦期以降は一揆は持続的に起り、矛盾は徐々に深化しつつ化政・天保期の第二のピークとなり、天保大一揆（天保二年、1831；引用者）に象徴される形で爆発する」[田中彰、1965、pp. 70-71]。この天保の大一揆は藩全域で113ヵ村、参加人数およそ13万人強であり、「吾藩有史以来絶無ノ暴動」であったと言われている[田中彰、1965、p. 79]。

封建体制の崩壊を予見させるこうした大規模な一揆により、幕府や諸藩は「改革」を迫られた。幕府の水野忠邦の天保改革や、長州藩の村田清風らの改革とその後の周布政之助らの安政改革などである。これらの幕藩体制側の改革は封建制度の矛盾を克服しようとするものだったが、同時に海防問題にも取り組まざるを得ない改革でもあった。資本主義列強の圧力が全国的な課題となりつつあったのである。

ちょうど大塩の乱が起った年に、アメリカ商船モリソン号が日本人漂流民の送還を兼ね

て貿易開始を求めて浦賀に渡来した。モリソン号は打ち払い令により砲撃された。この外国船の再渡来の対応をめぐって幕府内部で意見が分かれたが、最終的には評定所一座の打ち払い策が採られた。これを聞いた渡辺崋山や高野長英らは幕府の打ち払い策を批判した為弾圧された（蛮社の獄）。

吉田松陰の生きた19世紀前半は、資本主義が全欧州に浸透し、大西洋、インド洋そして太平洋に連なり東洋海域にせまっていた。この資本主義の拡大を具体的に推進した手段の一つが蒸気船による定期航路の開設だった。1840（天保11）年、外輪蒸気船四隻をもって大西洋横断の定期航路が開かれた。ここから郵便定期航路が拡張し世界の海を繋いでいった。[今津、p. 254]

1820年代から30年代まで、イギリス東インド会社の帆船によってロンドンからアフリカ喜望峰経由でインドまで至る東インド航路は片道で4～6カ月間を要した。1845年になると蒸気船の就航によってロンドンからシンガポールまで41日間、シンガポールから香港まで7日間で、毎月郵便物その他を運んできた[Boyd, pp. 101-102]。大英帝国は1840年代から50年代にかけて、アヘン戦争、中国市場開放、香港奪取、「太平天国の乱」への介入、クリミア戦争、（アメリカによる）日本開国・通商条約締結と、「自由貿易」の舞台である世界市場の環を整えつつあった。さらに60年代からは英米、英仏、英露の対立が激しくなり東アジアをめぐる市場争奪の競争が激しくなった[金、2008、p. 68]。

とくに中国をめぐる競争が際立っていた。中国大陸は欧米諸国の求める物産の主要な生産地であり、成長する欧米近代産業にとって巨大な市場と見做されていた。大英帝国の場合、「東洋に大きな権益」を持ち、「巨大な通商を営んで」おり、世界市場の環を繋ぐ連鎖を維持することが外交の基本目標であった。

英国の駐日総領事オールコックによれば、「この帝国という連鎖の一環たりとも破られたり傷つけられたりするようなことがあれば、たとえそれが日本のように東洋のはてにある遠隔の土地で起ったとしても、連鎖全体にたいしてなんらかの危険と害をおよぼさずにはおかない」。彼によれば、その危険と害を及ぼす恐れがあるのはロシアであり、「中国と満洲の海岸からアメリカの海岸にいたる水域一帯において」脅威となっているという。[大君の都(下)、pp. 95-98]

一方、ロシア船はすでに18世紀から日本近海に現れ通商を求めていた。1851年になって、ロシアは樺太で石炭を発見し、開発を行い、極東への進出を積極的に進めるようになった。クリミア戦争の後、極東へのロシアの進出を警戒するイギリスは軍艦用燃料の確保という点で九州北部の石炭資源に一層関心を持つようになった。この背景にはロシアが樺太で良質の石炭を採掘していることに対する軍事的な対抗関係があった。[杉山、pp. 567-568]

かくしてイギリスをはじめロシア、アメリカ、フランスなどが日本開国をせまり、蒸気船の石炭、飲料水などの物資を補給する港を確保し、日本市場を開放して有利な条件で貿易をすることを規定した対日通商条約を締結したのである。

3. 朝鮮観の歴史的継承と吉田松陰

本章では、徳川期の伝統的朝鮮観を概観し、それが教養人層に共有された一種の「潮流」として定着していったことを明らかにし、さらにそれを吉田松陰がどの様に継承していったか論じる。具体的には、それぞれ教養人の残した文献史料や先行研究などによって「伝統的朝鮮観」を概観していく。つぎにこれが「記紀」をベースとする歴史認識に基づいて

教養人社会に「常識」的見方・イメージとなっていく過程を明らかにした上で、それを吉田松陰がどの様に継承したのかを論じる。

開港後の日本に西洋諸国から一層の圧迫が加えられるようになると、いわゆる幕末の志士たちは「だれでもさかんに海外進出、朝鮮・中国侵略をとこなえた」と言われている[井上、1975、pp. 9-10]。はたして本当に開港後に、すなわち吉田松陰の亡くなった1859年以降になってから、突然と多くの志士たちがアジア侵略を主張するようになったのだろうか。開国のずっと以前から積極的に海外進出をとこなえる学者や思想家は相当多数居たように思われる。あるいは相対的な意味において、思想界をリードした教養人のみならず、地域の郷土、豪農、豪商といった封建的階層を出自とする一般の志士たちの「だれでも」が、開港後からさかんにアジア侵略を口にするようになった、という意味であろうか。ここでは、すこし歴史を遡って徳川幕府と朝鮮王朝との国交が回復された頃からの朝鮮観を見ていくことにしよう。

豊臣秀吉の朝鮮侵略から八年後に、対馬藩による巧妙な仲介、すなわち朝鮮側の出した講和条件として、まず初めに徳川家康の方から朝鮮国王に国書を送れという要請に対して、対馬藩が内密に「国書」を偽造し、その文末に明国年号を書き、家康に日本国王の称号を用い、「日本国王」の印を押して、朝鮮へ届けた。これによって徳川幕府と朝鮮王朝との交流が始まった^①。両国政府間の交流はこれ以後およそ二百年に及ぶ。

朝鮮通信使の来日は、日本人儒者との交流のみならず、江戸や大坂などで人々が沿道に集まり、まるで市が立った様に混雑し、なかには一篇の詩文を求めて一行に近づく者もいたという。この様な風潮が記録される程に、当時の朝鮮を文化的先進国とみなし尊敬する態度見方が広範かつ長期にわたってあった

[矢沢、pp. 17-18]。

徳川時代、朝鮮の学者、典型的には李退溪とその朱子学に対する尊敬の念があった反面、朝鮮に対する優越感も存在していた。それは儒学者、国学者のみならず、幕府閣僚や諸藩の支配層にまであった。たとえば、幕閣の土井利勝や酒井忠勝の言として伝えられている文書『朝鮮信使記録』荒野、p. 6]で、「大炊頭 讃岐守曰、此事寔宜、此非日本所慚第一耶（朝鮮に宛てた幕府国書に明の年号を使用したことが最も恥じる所ではないか）、其朝鮮者明之幕下（朝鮮は明の家来）、我日本者特不然也（我が日本はひとり家来ではない）、開闢已降偉然建紫宸（建国以降立派な天皇の宮殿を建てている）、特更改天元（ことさらに元号を改め）、則自今而通用之書可記我元（今より通用の文書には我が天皇の元号を記す）」とある。1636年からは朝鮮宛ての外交文書に日本年号を使うようになり、日本は朝鮮とは異なって明朝から独立しており冊封を受けておらず、独自の元号をもつ天皇の支配する国であると主張している。したがって、幕閣の意識としては、徳川幕府は大陸の華夷秩序の外にあり、むしろ日本を「華」として朝鮮通信使を「入貢使節」として位置付け、幕府の威信を高めようとした[山田、pp. 177]。「中華」である日本の天皇（皇帝と同等）に対して北方の蝦夷、南方の琉球とともに西方の朝鮮を朝貢国として「服属」することが想定されていた。

この時期、岡山藩に仕えた儒学者熊沢蕃山や、儒学者であり山鹿流兵学をおこした兵学者でもある山鹿素行なども朝鮮に対する優越感を強く抱いていた。熊沢蕃山は中国以外の周辺諸国で朝鮮、琉球、日本がすぐれた国だと云う。その中でも日本は天照大神、神武帝

の徳により最もすぐれた国であるとする。朝鮮は日本よりも一等劣る国だという意識があった[矢沢、p. 19]。

山鹿素行（1622-85年）はその著「謫居童問」において、朝鮮について次のように書いている。「朝鮮は昔武王封箕子の地也。その國、始はわづかの土地にして人民も少く、風俗すなほなりける。箕子、制八條之教と也。其の後燕人衛滿に奪はれてける。漢武帝朝鮮を割きて四郡に定め、是れに王を不立、ここに扶餘國の朱蒙と云ふもの朝鮮の地に居て高氏と號し、國を高麗と號す。、、〈略〉、高麗の王孫高氏たえけるを、五代の時王建と云ふもの又のこれる高氏をたひらげて此の國に王たり。而して新羅・百済をも合せ都を松岳にうつし、平壤を以て西京とす。大明洪武の比その臣李成桂と云へるもの、主人を弑して立ち高麗に王として、大明にこうて國號を改め、これより今に至るまで朝鮮と號す。然れば其の國亡ぶること二度、易姓こと四度也。、、〈略〉、文字学書ありといへども、更に聖經を不知、況や武義を不心得ゆゑ、兵器弓馬も不宣、或は從契明（丹）或屬大明。其の國八道に分つといへども、其の兵三十萬に不出也。、、〈略〉、新羅は唐玄宗號君子國、百済は以百家濟小國也、各々從本朝（日本）受命、共に本朝の人物に不若、、、〈略〉、」と[山鹿素行全集〈思想篇〉第十二卷、pp. 331-333]。素行によれば、朝鮮は二度国が滅んで、易姓革命を四度経験し、「聖經」を知らず、武義も心得ず、軍事力も大したことはなく三十万以下で、契丹に從つたり明に服属したりする国である。新羅は唐の玄宗皇帝が君子国と呼んだが、百済は百余りの小国に分かれ各々が日本に服属している。その両国とも日本には敵わない。

① なお、朝鮮側からの講和の条件は二つあって、一つは秀吉の戦役の際に、朝鮮王族の墓を荒らした犯人を捕縛し送り届けること、もう一つは先に国書を差し出すことが当時外交上相手への恭順を意味することになるという状況で、徳川家康の方から先に朝鮮国王へ国書を送ることが求められた。詳しくは田代和生、1983『書き替えられた国書』中公新書を参照されたい。

山鹿素行は上記の朝鮮についての記述とは対照的に、日本について「日本書紀」に依拠して次のように書く。「本朝は海中に独立して四時不違、五穀つねに豊饒也。往古の聖神此の國を國中柱と定め、豊葦原中國と稱し玉ふ。是れ其の天地の中精を得れば也。、〈略〉、神武帝天下を平均ましまして天神地祇の宗廟を祭り、萬々世の政を示し玉うて人皇の正統相続して姓をかふることあらず。、〈略〉、神功帝征三韓玉うて、八十艘のみつぎものを奉り、、〈略〉、況や任那・安羅・加羅等の屬國不可違挙。、〈略〉、されば高麗文武共本朝に及ぶべからず。況や豊臣家の朝鮮征伐をや。四海廣しといへども本朝に比すべき水土あらず」と〔山鹿素行全集〈思想篇〉第十二卷、pp. 333-334〕。

素行はさらに「配所残筆」において「況や勇武の道を以ていはば、三韓をたひらげて、本朝へみつぎ物をあげしめ、高麗をせめて其の王城をおとし入れ、日本の府を異朝にまうけて、武威を四海にかがやかす事、上代より近代迄しかり。本朝の武勇は異国迄是れをおそれ候へ共、終に外国より本朝を攻取り候事はさて置き、一ヶ所も彼の地へうばはるる事なし。、〈略〉、本朝と異朝とを、一々其のしるしを立てて校量せしむるに、本朝はるかにまされり。誠にまさしく中国といふべき所分明なり」〔山鹿素行全集〈思想篇〉第十二卷、pp. 592-593〕と書いている。

このように山鹿素行の日本優越主義的な考え方は朝鮮との対比において展開されている。彼は「日本書紀」に依拠して朝鮮を蔑視し、彼の時代から捉えた「上代から近代」に至るまで万世一系の天皇制にある日本が朝鮮を攻めて朝貢させてきたと力説する。こうした「日本書紀」の朝鮮観は素行以後、読書人層に定着していくことになる。

儒学者であり政治家である新井白石(1657-1725年)も例外ではなかった。白石は朝鮮が昔日本の属国だったという意識を

持っていた。白石によれば朝鮮は天性悪賢く、うそつきで、利益のあるところ信義も顧みない国であり隣交を結ぶべき国ではないと云う。しかも豊臣秀吉の侵略の後、日本が朝鮮から撤兵し国交を結んで朝鮮を再生させた「恩」を末長く忘れてはいけないと、白石は主張するのである〔矢沢、p. 22〕。

この様な朝鮮に対する日本優越主義は18世紀に至って、古代の「神代の道」を理想とする国学に引き継がれていった。賀茂真淵(1697-1769年)は「儒の道こそ其国をみだすのみ」として古代日本を理想とする道を追求めた。さらに本居宣長(1730-1801年)は「古事記」の神々の世界に永遠不変の道を見出そうとする。天照大御神の天壤無窮の神勅による皇統を継ぎ、神代の理想的な在り方を体現しているのが天皇だと云う。日本はその天皇によって神代につながる「皇国」であるが故に優れていると考える。本居宣長の後継を自称した平田篤胤(1776-1843年)も「皇国」の卓越性を強調する。彼は「皇国」たることの意義を明らかにし、「天地の根帯」「万国の祖国本国」であり「我が御道」こそ普遍性をもった「宇宙第一の正道」なのであって、「万国の君師」として世界に臨むべきであるという。〔吉野、2002、pp. 35-39〕

18世紀末になるとロシア船の出現に刺激を受けた林子平(1738-1793年)が「三国通覧図説」や「海国兵談」を書いて北方問題の急務を説いた。林子平は列強の侵略から日本を守る為に朝鮮や琉球、蝦夷を要衝と位置付ける。彼は「海国兵談自跋」の冒頭に「予響に三国通覧を著ス其書也 日本三隣国、朝鮮、琉球、蝦夷、の地図を明せり其意、日本の雄士、兵を任つて此三国江入ル事有ン時、此図を諳ンじて應変せよト也、亦此海国兵談は彼ノ三隣国及び唐山、莫斯科未亞(ムスコウピヤ)、等の諸外国より海寇の来ル事有ン時、防禦すへき術を詳悉せり、、」云々と周辺諸国への侵略や防禦を目的として著述を行った

ことを明記している。「海国兵談」は軍事技術、戦略、兵站、武器、教育など具体的かつ詳細にわたる兵学書であるが、その中で、小国「阿蘭陀（オランダ）」の富国強兵策を述べ「呱呱國（ジャワ）」や「阿墨利加洲」の一国を「切取て」「己レが領國ト為せり美哉勇哉可思可思」[林子平全集、第一巻、pp. 375-376]と賞賛したり、「神武帝、始て一統の業を成て人統を立給しより神功皇后、三韓を臣服せしめ太閤の朝鮮を討伐して今の世迄も 本邦に服従せしむる事など皆武徳の輝ル所也」[林子平全集、第一巻、p. 349]として朝鮮侵略を称えている。さらに秀吉の朝鮮侵略の際、「敵地江踏込」んだ加藤清正の軍兵統率を尊いものであった[林子平全集、第一巻、pp. 275-276]とも書いている。

平田篤胤の世界観を受け継いだ佐藤信淵（1769-1850年）は自らの侵略構想を国学の思想によって根拠づけている。佐藤の著した「混同秘策」にそれは明快に述べられている。その冒頭で「皇大御国ハ大地ノ最初ニ成レル国ニシテ世界万国ノ根本ナリ。故ニ能ク其根本ヲ経緯（秩序を整え筋道を正す）スルトキハ、則チ全世界悉ク郡県ト為スベク、万国ノ君長皆臣僕ト為スベシ。謹テ神世ノ古典（記紀）ヲ稽（かんがう）ルニ、『所知青海原潮之八百重也（『日本書紀』p. 51. 月読みの尊は青海原の潮のやほえをしらすべし⇒イザナギの尊が三人の子供の神にそれぞれ仕事を命じて、、、月読みの尊<二人目の子供の子供の神>は海を治めよ、、、という神話）』トハ皇祖伊邪那岐大神ノ速須佐之男命ニ事依賜フ所ナリ。、、〈略〉、抑モ世界ノ地理ヲ審ニスルニ、万国ハ皇国ヲ以テ根本トシ、皇国ハ信（まこと）ニ万国ノ根本ナリ。其子細ヲ論ゼン。抑皇国ヨリ外国ヲ征スルニハ其勢順ニシテ易ク、、〈略〉、他邦ヲ経略スルノ法ハ弱クシテ取易キ処ヨリ始ルヲ道トス。今ニ当テ、世界万国ノ中ニ於テ皇国ヨリシテ攻取易キ土地ハ、支那国ノ満洲ヨリ取易キハ無シ。、、〈略〉、如此ナレバ黒竜江ノ地方ハ将ニ悉ク我が有ト

為ラントス。、、〈略〉、夫畜ニ満洲ヲ得ルノミナラズ、支那全国ノ衰取モ亦此ヨリ始ル事ニシテ、既ニ鞆ヲ取得ルノ上ハ、朝鮮モ支那モ次デ而シテ凶ルベキナリ」[日本思想大系45、pp. 426-431.]という。すなわち佐藤信淵によれば、日本は人類史上最初の国家であり世界の中心、根本であるが故に、本来全世界をすべて統治すべきであり、日本書紀をみれば、イザナギの神がスサノオノ命に海（世界）を治めよと賜ったのである。したがって日本が外国を征服するのは順当であり、その計略は「弱クシテ取易キ」所から始めるのがよい。今、世界の中で、日本が攻め取り易い国は中国の「満洲」であり、黒竜江までの地域はすべて日本の所有とする。ただ単に「満洲」のみならず朝鮮も中国全土も相次いで征服に乗り出すべきだという。

さらに信淵はその侵略構想の具体的な手順を詳しく書く。「第五ニハ、松江府、第六ニ萩府、此二府ハ数多ノ軍船ニ火器・車筒（大銃）等ヲ朝鮮国ノ東海ニ至リ、咸鏡・江原・慶尚三道ノ諸州ヲ経略スベシ。第七ニハ、博多府ノ兵ハ数多ノ軍船ヲ出シテ朝鮮国ノ南海ニ至リ、忠清道ノ諸州ヲ襲フベシ。朝鮮既ニ我松江ト萩府ノ強兵ニ攻ラレ、東方一円ニ寇ニ困ムノ上ハ、南方諸州ハ或ハ空虚ナル処アルベシ。直ニ進テ此ヲ攻メ、大銃・火箭ノ妙法ヲ尽サバ、諸城ミナ風ヲ望テ奔潰スベシ。乃チ其数城ヲ取テ皇国ノ郡県ト為シ、清官及ビ六府ノ官人ヲ置キ、産靈ノ法教ヲ施シ、厚ク其民ヲ撫育シテ教化ニ帰服セシメ、此処ヨリ又軍船ヲ出シテ時々兵ヲ渤海辺ニ輝カシ、登州・萊州（山東半島北岸の地）等ノ浜海諸邑ヲ擣シムベシ。此辺ハ彼ガ王都北京ニモ程近ケレバ、支那全国鼎ノ沸ガ如クナルベシ」と。そして最後に、自分は既に老年となったので、自国の守りを強くする為に他国を攻め取ることに専念すれば国家安泰であると考え、海外侵略して併呑する方略を論じたこの「混同秘策」を子や孫の代に遺すことにしたという。

[日本思想大系 45、p. 434. 436.]

このような古代からの「遺産」ともいえる日本優越主義的思考を吉田松陰と同時代人であった橋本左内も受け継いでいる。左内は「坐ながら外国の来責の俟居候よりは、我より無数之軍艦を製し、近傍之小邦を兼併」すべきだと主張し、周辺諸国への侵略によって外圧を切り抜けようとする〔吉野、2002、p. 70〕。さらに彼はこうも言う。安政四（1857）年の松平慶永の建白書は橋本左内の起草であると言われていたが、それには、強兵の基は富国にあるといい、今後「商政」をおさめ、貿易の業をひらくべきだとして、「我より無数の軍艦を製し、近傍の小邦を兼併し、互市の道繁盛に相成候はば、反て欧羅巴諸国に超越する功業も相立」と論じ、人材の登用、兵制改革、諸技術の学校の設置などを主張した。この富国強兵策と侵略的貿易策とは、目的のためには手段を選ばないという考え方を反映している。目的と手段とを分離した上で、その関連を作為、設定する。こうして戦略、戦術が区別され、目的を実現するために政策を立案する〔遠山、1968、pp.117-118〕。橋本は単に伝統的な記紀の世界観を受け継ぐのみでなく、物事を合目的に捉える現実主義的な考え方も備えていた。

これまで見て来たように徳川時代の教養人は、朝鮮に対して優越感をもつことによって日本の卓越性を再確認してきた。それは中国大陸の帝国を意識し、朝鮮を競争相手として貶めるものであった。その根拠として取り上げられてきたのが「日本書紀」「古事記」といった伝説的神話の要素を含んだ古典的歴史書だった。そこには中国や朝鮮とは違う「万世一系の天皇支配」の物語がひろがっていた。

さて、一般的に儒教（朱子学）と国学を学んできた教養人は、中華思想の持つ自己普遍性の強調と、日本も含む周辺地域の民族文化への差別に対して反発したのではないかと思

われる。だからこそ日本的な特殊性に逃げ込み、そこに開き直ることによって同じ周辺地域の朝鮮を見下して、「日本書紀」の中から日本の優位性を求めたものと考えられる。松浦玲氏によれば〔松浦、p. 45〕、本居宣長の「古事記伝」の序文に鮮明に述べられている様に、日本の尊貴性のかなめは万世一系の天皇制であった。それによって世界を解釈し直すと、儒教の普遍的政治理念はどうでもよくなり、皇統を戴く日本が無条件に優位性をもつという「選民思想」が生まれる。それが幕末になってより強く前面に出て来たものと思われる。

かくして幕末期においては、平野篤胤、佐藤信淵、橋本左内、真木和泉、山田方谷や老中板倉勝静、薩摩藩主島津斉彬、長州藩士桂小五郎（木戸孝允）、対馬藩士大島友之允など多くの教養人、政治家、志士たちにとって、朝鮮への侵略論はすでに時代の「潮流」となっていたと考えられる。木村氏も、幕末の朝鮮進出論を主だった思想家について検討を加えた後で、「三韓征伐・三韓朝貢については、当時の一般的な“知識”ないし“常識”であったといえる」〔木村、1995、p. 20〕と論じている。

では、その伝統的に形成されてきた「潮流」や「国体賛美」は吉田松陰において、どのように継承されているのだろうか。ここで、吉田松陰と儒者山県大華との論争を取り上げてみたい。松陰は「講孟余話」において、「孔孟生國を離れて他國に事へ給ふこと濟まぬことなり。凡そ君と父とは其の義一なり。我が君を愚なり昏なりとして、生國を去りて他に往き君を求むるは、我が父を頑愚として家を出でて隣家の翁を父とするに齊し。孔孟此の義を失ひ給ふこと、如何にも辨ずべき様なし」、「君に事へて遇はざる時は諫死するも可なり、幽囚するも可なり、饑餓するも可なり」、「故に漢土の臣は縦へば半季渡りの奴婢の如し」、「我が邦の臣は譜第の臣なれば主人と死

生休戚を同じうし、死に至ると雖も主を棄てて去るべきの道絶えてなし」「我が國體の外國と異なる所以の大義を明かにし、闔國の人は闔國の為に死し、闔藩の人は闔藩の為に死し、臣は君の為に死し、子は父の為に死するの志確乎たらば、何ぞ諸蠻を畏れんや」[全集〈第三卷〉pp. 18-20]と講じる。

この君臣関係を親子関係のように絶対的なものとして捉え、主君につかえる臣は死に至るまで忠義を守るべきで、ここが日本の国体と外国との違いであるとする松陰の考え方を、大華は批判している。「天下に聖君在して道行はれば、孔孟何ぞ生國を離れて世に用ひらるることを欲し給はんや。天下無道にして人禽獸に陥り、民塗炭に墜つるゆゑ、出でて道を世に行ひ天下を平治せんことを欲し給ふ」と。さらに続けて「父は其の生む所なり、離るることを得べからず。君は其の時に當りて、義を以てこれに仕ふるゆゑ、『道合はざれば則ち去るべし』の義あり。然りといへども、世祿の臣は其の恩義深厚なるを以て、君と休戚を同じうすべし。これは漢土といへども同じことなり」、「然れども又其の理、父と同じかるべからず」、「堯舜は天下第一等の人ゆゑ、衆人皆これに服して天下の君となり給へども、其の子は不肖にして天下に君たるに足らず。故に天下第一等の人を撰んで天下を譲り給ふなり」として、「君道は天下を治むるを以て職とし、其の職を得ざれば其の位はかはらずといへども、其の職は他人の手に移ること、和漢共に其の理は同じことなるを知るべし」[全集〈第三卷〉pp. 525-531]と、国学を修得した吉田松陰の精神論的捉え方を批判して「君臣義合」こそが全うな政治の道だと大華は言う。要するに、大華は、民が塗炭の苦しみを受けることが無いように天下の君たる者は民の為に道理に合致した「義しい」統治をするべきであり、その職責を果たせないならば他の人が代わって天下を治めるべきだとし、この理屈は中国でも日本でも同じだ

と言っている。

さらに大華は松陰の大八洲開闢の由来を批判して、「天日とは太陽をいへるにや。又は太祖照臨の徳を以て太陽に比したる辭なるにや。もし太陽を指していれば、太陽は火精にて、其の地球に倍すること幾許を知らず」[晝夜、外天を一周して、徧く世界萬國を照す。これを以て獨り我が一國の祖宗と云うこと、極めて大怪事なり]「これは神道者又は国学者流、近世水府一流の学者などの主張する所」である。「水府一流の学に新論と云う書あり。其の首に『神州は太陽の出づる所、元氣の原づく所』と之れあり」[當今天文地理のこと開けて五尺の童子も能く辨知する所なるに、今の世に當りて此の迂謬の説を為すは何ぞや]と痛切なる批判をする。[全集〈第三卷〉pp. 540-541]

これに対して松陰は次のように反論する。「凡そ皇国の皇国たる所以は天子の尊、萬古不易なるを以てなり。苟も天子易ふべくんば則ち幕府も帝とすべく、諸侯も帝とすべく、士夫も帝とすべく、農商も帝とすべく、夷狄も帝とすべく、禽獸も帝とすべし。則ち皇国と支那・印度と何を以て別たんや」、「漢土には人民ありて、然る後に天子あり。皇国には神聖ありて、然る後に蒼生あり。国体固より異なり。君臣何ぞ同じからん。先生神代の卷(日本書紀、古事記)を信ぜず。故に其の説是くの如し」、「今乃ち日本の名古からざるを以て而ち太陽の出づる所を疑う」、「皇国の道悉く神代に原づく。則ち此の卷(日本書紀)は臣子の宜しく信奉すべき所なり。其の疑はしきものに至りては闕如して論ぜざるこそ、慎みの至りなり」。「普天卒土、王臣王土に非ざるなしと」[全集〈第三卷〉pp. 548-553]

論理的な大華に対して松陰は皇国たるゆゑんは万世一系の天皇の存在であると強調する。中国には人民があってその後に天子があると言うが、日本は天皇がいてその後に人民がいるのだ。日本と中国は国体が違うのだ。

大華先生は「日本書紀」の神代の物語を信じていない。だから日本が太陽の出ずる国であることを疑っているのだ。「皇国の道」はすべて「日本書紀」の「神代」に基づいている。それを民は信奉すべきである。疑わしいのであれば議論しないのが慎みというものだ。日本の民や国土はすべて天皇の臣下であり天皇の土地なのだ、と松陰は言う。彼は「日本書紀」を根底にすえた伝統的な世界観（朝鮮観を含む）を吸収し集約した人物であると思われる。

4. 吉田松陰の朝鮮観；「状況対処」から

吉田松陰が、国際情勢や朝鮮について文書の形で初めて記述したのは弱冠二十歳の時であった。彼は長州藩の兵学者として、嘉永二（1849）年3月に、「水陸戦略」と題する文書を提出している。これは藩主の命により異賊防禦の策として水陸戦争の方略を問われた際に上呈した文書で「他見を禁ず」と注意書きされていた。この文書の中に、当時の松陰が長州藩を取り巻く国際情勢を述べた個所がある。

「異賊共來寇の氣遣ひは之れなき様申す者も間々御座候處、何の見定めを以て右様に申す儀に候や心得難く存じ奉り候。抑々往を以て來を知り、顛を以て隠を占ひ候處、佛郎西・英吉利の二虜歲月を追ひて西南より東北に進み候様子と相見え候。既に英吉利は印度を取り濠斯多辣利を開き、蘇門答刺其の外の海島に據り、天保年間に至り候ては遂に滿清を亂り候程の様子、且つ二虜共に度々琉球・朝鮮の地に上陸致し、無法を行ひ候様の儀も之れあり。尚ほ又魯西亞窮北の地より起り止百里亞を開き加摸沙都加に至り、都府を構へ軍艦を備へ海島を取り、我が奥蝦夷に迫り候様子、過慮仕り候へば我が神州を中にして異賊共取圍み候形に相成り候故、窺視の奸

情之れなしとは相見え難く、此れ迄異變之れなきは我が國に乗ずべき虚隙之れなく、且つ干戈を動かし候名之れなき故にて、來寇の儀之れなしとは申し難き次第に存じ奉り候事」。
[全集〈第一巻〉pp. 246-247]

この時、松陰はすでに英国がインドを獲得しオーストラリアを開発し、スマトラ島などの諸島を拠点として、天保11（1840）年のアヘン戦争を引き起こしたことを指摘している。さらに彼は英仏両国がたびたび琉球や朝鮮に上陸して無法を行い、北はロシアがカムチャッカに至り都市を建設し軍艦を備え、奥蝦夷つまり樺太に迫っている情勢を見通して、日本がそうした異国に取り囲まれており、これまで長州藩に何ら異変が無かったのは隙を見せずまた武力を行使する「名分」がなかった為だとはもはや考えることはできない情勢だと説いている。

この頃の松陰は朝鮮に英仏両国人が上陸して不法を働いていると、淡々と状況を述べている。また彼は伝統的な「名分論」を越えたところで外圧への対処策を考えており、東アジアの状況を相当程度事実に基づいて捉えているように思われる。こうした現実主義的な認識態度を持ち始めているとはいえ、若き藩の軍学者吉田松陰は依然として西洋の大砲を備えた巨船に対する山鹿流兵学の効用を重んじて「吾が國は吾が國の長ずる所あり、其の長ずる所は即ち吾が兵制に叶ひ吾が人氣に宜敷き所にて之れあるべく候」[全集〈第一巻〉p. 249] といっている。

この翌年から吉田松陰にとって大きな転機が訪れる。それは萩から出て広い世界を垣間見るようになったことである。すなわち彼は九州へ遊学し、平戸長崎で唐館、蘭館を訪ね、中国語を習い、オランダ艦に試乗する。さらに兵学研究のため藩主に従って江戸に行き、山鹿素水や佐久間象山などについて学ぶ。そして藩の許可を得ずに東北遊学の旅にでて亡命の罪を受け士籍を削られ萩に帰えることに

なる。ところが嘉永六（1853）年に諸国遊学の願いが聞き入れられ再び江戸に赴く。吉田はペリー来航を聞いて浦賀に行き、さらにプチャーチンが長崎に来航した際には長崎へと精力的に歩いている。そして安政元（1854）年3月に、再度来航したペリー艦隊に乗り込み海外渡航を試み、失敗して投獄される。このおよそ四年間に彼は攘夷、すなわち対外策に主たる関心を向けるようになる。

彼は安政元年10月に江戸から長州萩の野山獄に移されてから書いた「幽囚録」の中で次のように書いている。

「皇和の邦たる、大海の中に位して、萬國之れに拱く。」「火輪の舶作らるるに及んで、其の制益々巧みに其の行益々廣く、海外萬里も直ちに比隣となる。」「神州の西を漢土と為し、海中の諸島及び亞弗利加の喜望峰と為す。漢土は土地廣大、人民衆多にして、其の海を隔てて近きものなり。近ごろ聞く、英夷の寇あり、明裔の變ありと。若し洋賊をして其の土に蟠踞せしめば、患害勝げて言ふべからざるものあらん、而して吾れ未だ其の帰着を詳かにせず、察せざるべからざるなり。且

つ其れ廣東の互市と諸島・喜望峰とは皆萬國の要會たり、以て四方の新聞を得べし。神州の東を米利堅と為し、東北を加摸察加と為し、^{オホーツク} 神州の以て深患大害と為す所のものは話聖東なり、魯西亞なり」、^{オーストラリア} 「濠斯多辣利の地は神州の南に在り、其の地海を隔てて甚しくは遠からず、〈略〉、苟も吾れ先づ之れを得ば、當に大利あるべしと。朝鮮と満州とは相連りて神州の西北に在り、亦皆海を隔てて近きものなり。而して朝鮮の如きは古時我に臣属せしも、今は則ち寝や偃る、最も其の風教を詳かにして之れを復さざるべからざるなり。凡そ萬國の我れを環繞するもの、其の勢正に此くの如し。而して我れ茫然手を拱きて其の中に立ち、之れを能く察することなし、亦危ふからずや。」「然りと雖も是れ特だ傳聞の得たる所、文書の記する所然りと為すのみ。其の果して然るや否や、遂に未だ知るべからざるなり。安んぞ俊才を得て海外に遣はし、親しく其の形勢の沿革、船路の通塞を察するに如かんや^②」。[全集〈第一卷〉 pp. 347-350]

この「幽囚録」に見られる吉田の対外問

② 「日本は大海の中に位置し万国にとりまかれている。」「蒸気船が作られるようになり、その性能はますます精巧になり航行もますます遠く拡大され海外萬里の地も隣接するようになった。」「日本の西には中国があり、さらに向こうには諸島、アフリカの喜望峰となっている。中国は国土が広く、人民も多くて、日本とは海を隔てて近い。近ごろ聞くところによれば、中国でアヘン戦争がおり、太平天国の変があったという。もし、欧米列強が中国の国土を占領し勢力をはるならば、その害たるや一言言うまでもなく大きなものとなろう。私はまだその事件の帰着を詳らかにしていないが、考察しなければならない。広東の貿易港と諸島・喜望峰は世界における拠点であり、世界各地から新たな情報を得ることができる。日本の東にアメリカがあり、東北にカムサッカとオホーツクがある。日本にとって大害となるのはワシントンでありロシアである。」「オーストラリアの地は日本の南にあり、海を隔てているが、あまり遠くはない、〈略〉、もし我国がこれを獲得すれば大きな利益を手にするだろう。朝鮮と満州は相連なって日本の西北にあり、海を隔てて近くにある。朝鮮のごときは古くは我国に臣属していたが、いまはやや高ぶっている。その状況を詳しくしらべて朝鮮を元のように復しなければならない。おおよそ万国が日本を取り巻いている状況はこの様なものである。しかし日本はただ手をこまねいているだけで、この状況を十分察していない。危険なことだ。」「これはただ伝聞にて聞いたことや文書に書かれている所をその通りだと受け取っているだけだ。はたして事実か否かは未だ知ることができない。満足するには優れた人材を海外に派遣し、くわしくその諸外国の形勢、沿革や航路の状況を視察させることであろう。」[全集〈第一卷〉 pp. 347-350]

題についての認識は、「水陸戦略」を上書した時とは違っていた。吉田は嘉永三（1850）年から安政元（1854）年まで、各地を遊学し見聞を高め、佐久間象山などの洋学者たちと出会い、ペリーやプチャーチンの来航を肌で感じ熱烈な攘夷論を唱えていた。「水陸戦略」を書いた頃と「幽囚録」の頃では、基本的には欧米の圧力に日本が取り囲まれているという認識は一致しているが、欧米列強への警戒心が英仏から米露に移り、対処策がより積極的な海外進出を唱えるようになった。たとえば、日本もイギリスの様にオーストラリアに進出して獲得すれば大きな利益を得るとか、朝鮮に対して「古時我に臣属」していた状態の復帰を説くようになる。

さらに松陰は「講孟余話」（安政三（1856）年著）でおおよそ次のように述べている。私（松陰）がいつも思う事だが、太閤秀吉は天皇の関白となり、天下の諸大名を率い、わずかに朝鮮に兵を進め明を脅かしたただけだ。秀吉が死ぬとその功業も廢れた。私に志をとげることがを為させてくれれば、朝鮮、支那は勿論のこと、満洲、蝦夷およびオーストラリアを平定し、その他の土地は後世の人に功名を挙げるために残しておこうと。さらに松陰曰く、私は神州（日本）をみずから担い、四方の夷狄を討伐しよう欲している。この孟子の一章を以て、私は益々自分の考えを信じて断じて疑う事は無い。今、神州を興隆し四方の夷狄を征伐することは仁道であると。[全集〈第三卷〉p. 298, 319]

この信念に基づいて松陰は単なる海防策ではなく、より積極的な攘夷策を展開する。それは国を保持することは、ただ単にその持っているものを失わないという事のみでなく、その欠けるものを増やすことであるという考え方に基づいていた。松陰によれば、日本は急いで軍備を固め、軍艦や大砲を備えたならば蝦夷地を開墾して諸大名を封じ、隙に乗じてカムチャッカ、オホーツクを奪い取り、琉球を

内地諸侯同様に参勤させ、朝鮮を責めて朝貢させ「古の盛時の如くならしめ」、北は満洲の地を割き取り、南は台湾、ルソンの諸島を奪い取り漸次進取の勢いを示すべきだ、と云う。しかるのちに、民を愛し士を養い、辺境を守るならば、すなわちよく國を保つという事なのだ。[全集〈第一卷〉pp. 350-351]

ここに至り、兵学者吉田松陰は積極的な西洋兵法の導入を主張するようになる。兵学校を設置し洋式軍隊の訓練法を教え、外国語を教育してオランダ、ロシア、アメリカ、イギリス諸国の原書を講義し、俊才を諸外国に派遣し、學術を研究させるべきだと。さらに各藩に艦船を購入させ全国の防衛に役立たせ、優れた人材を海外に派遣して造船や艦船売買の実体を研究させることを説く。[全集〈第一卷〉pp. 344-346]

日米和親条約（神奈川条約）締結の安政元（1854）年から二年余の後、吉田松陰は久坂玄瑞に宛てて手紙「復久坂玄瑞書」（1856年7月）を書いている。松陰曰く、今や徳川幕府がすでに米露二国と和親条約を交わした以上、これを反故にしてはならない。これを反故にすれば自ら信義を失う。まさに今の計りごと（国策）は、国の境界に用心し条約を厳守して、かつ米露を牽制し、「間に乗じて蝦夷を墾き琉球を収め、朝鮮を取り満洲を拉き、支那を壓し印度に臨み、以て進取の勢を張り、以て退守の基を固めて、神后（神功皇后）のいまだ遂げたまわざりしところを遂げ、豊国（豊臣秀吉）のいまだ果たさざりしところを果たすに若かざるなり」と。[吉田松陰・山鹿素行集、p. 244]

黒船に代表される強力な軍事力で迫ってくる米露二国と日本の「力」の差を認識して「今は」事を荒立てず慎重に対応し、米露の求める和親条約を厳守して、国境画定を注意深く行い国家の独立を図っていくべきであり、また米露を牽制しつつ、隙を見て近隣アジアを侵略し北海道、沖縄から朝鮮、満洲、中国、

インドまで膨張せよと云う。松陰の考える国策は神功皇后や豊臣秀吉が果たすことの出来なかったことを成就するためのものであるとも云っている。吉田松陰の攘夷論はここに至り、列強との力の差を認めて慎重に対処し、国家独立を図り、隙をみて近隣アジアを侵略して国力を高めるとする論となった。

ところで当時、尊王攘夷論を主導したのは『大日本史』編纂事業を行った、いわゆる水戸学（後期水戸学）であった。松陰も水戸を訪れたとき、しばしば会沢正志斎や藤田東湖らと会い、刺激を受けたと思われる。とくに会沢の『新論』はいわば尊攘派のバイブルとして全国の志士たちが愛読したものであった。水戸学において、尊王と幕府支配とは矛盾しなかった。水戸学は儒学の概念にもとづいて日本の「国体」を基礎づける。日本書紀や古事記に書かれている神々の事績、天孫降臨の経緯に「五倫の実」が体現されているが、その「名」がないと会沢たちは云う。よって「漢土にて教とする所の、忠、孝、仁、義等、様々の名に因り、孔子の盛徳を模範として」理論化することが水戸学にとっての課題となった。天祖（天照大神）の神勅をうけ三種の神器を授かった天孫が、無窮に皇統を伝えていくというのが日本の「国体」であり、そこに「君臣の義」「父子の親」が貫徹しており、天地開闢以来万世一系の天朝の偉大なることは宇内に比類なしとする。よって日本は万国に優越していると考える〔吉野、2002、pp. 39-40〕。このように水戸学は神話によって日本の優越性を作り出そうとする。この点に関しては水戸学と平田篤胤らの国学とは共通している。会沢正志斎の考えは吉田松陰にも引き継がれていった。おそらく吉田松陰は会沢の『新論』を読んだに違いないと思われる。

さらに吉田松陰は安政六年十月に入江杉藏宛に書いた手紙の中で、「扱て学問の節目を糺し候事が誠に肝要にて、朱子学じゃの陽明学じゃのと一偏の事にては何の役にも立ち申

さず、尊王攘夷の四字を眼目として、何人の書にても何人の学にても其の長ずる所を取る様にすべし。本居学と水戸学とは頗る不同あれども、攘夷の二字はいづれも同じ。平田は又本居とも違ひ、癖なる所も多けれども、出定笑語・玉禪等は好書なり。関東の学者道春以来、新井、室、徂徠、春臺等皆幕に依しつれども、其の内に一二ヶ所の取るべき所はあり。伊藤仁斎などは尊王の功はなけれども、人に益ある学問にて害なし。林子平も尊王の功なく攘夷の功あり」〔全集（第九巻）p. 488〕と彼の広範な読書をうかがわせる記述をしている。すなわち彼によれば、一つの学問だけを追っているのは世の中の役に立たず、尊王攘夷を眼目としてどんな人の書物でもどんな人の学問でもその長所を取るようすべきであると説く。国学と水戸学は違いもあるけれども、攘夷という観点からみれば同じものと云える。平田篤胤は本居宣長とも違い、癖多き所もあるが「出定笑語」「玉禪」等は好書である。関東の儒学者林羅山以来、新井白石、室鳩巢、荻生徂徠、太宰春臺等は皆、幕府におもねっているが、そのうち一つ、二つは学び取るべきものがある。伊藤仁斎などは尊王のための手柄はないけれども、人にとって有益な学問であり害はない。林子平も同じく尊王の手柄はないが攘夷にとっては手柄を立てているという。

松陰は学問が尊王攘夷の為に役立つものであるべきだと考えており、たとえどんな学問でもその一部でも尊王に貢献する知見や論理が含まれていれば、それを大いに学び吸収すべきであると勧めている。ここでは儒学も国学も平田派も水戸学もすでに超克されており、そうした諸学問は尊王攘夷という目的達成に動員されるものと捉えられている。

では吉田松陰にとって攘夷から尊王への繋がりは如何なるものであったのだろうか。攘夷にとって尊王が必要とされる理由は如何なるものであるのか。吉田は安政二（1855）

年に「清国咸豊乱記」を著わしている。これは清国でのアヘン戦争や太平天国の内乱についての概略が漢語で書かれたもの（原本は書名もなく著者名も不明）を、吉田が逐一对訳という形ではなく、要点をまとめ削除を施したり、難解な箇所は意識して取りまとめた書物である。内容は詳細かつ具体的であり、松陰が以前に朝鮮の風説として聞いたことと凡そ一致していると云う。また清国の商人が談じることは誤ったことも多いが、太平天国の内乱が旧明朝の漢族回復運動だとする見方は朝鮮の風説や本書とも皆一致しているという。[全集〈第二巻〉pp. 211-259]

松陰は外国の侵略がつねに国内政治の破綻に介在することを知っていた。彼は多くの尊王攘夷派の志士たちと同様に、迫りくる列強に対して独立を確保する為、列強による民衆への懐柔および内応を防ぎ、封建支配体制を強化することが必要だと考えていた。諸藩や幕領内では相次ぐ農民や都市庶民による一揆や打ちこわしが発生しており、幕藩封建体制を脅かしていた。この様な状況の中で尊王攘夷の志士たちは農民や庶民を信頼していなかった。松陰も例外ではなかったと思われる^③。尊王攘夷派の志士たちは内憂外患に脅かされていた。

ここに至り攘夷と尊王が不可分の問題となった。夷狄に対する中華（神州日本）の体制強化を図るために天皇の存在意義が強調され、古代王朝国家の周辺諸国との対外関係の「歴史」が回顧される。安政二（1855）年の「野山獄文稿」で、松陰は次のように書いている。およそ皇国に生まれたからには、わが国が世界各国よりも尊い理由を知らなければならぬ。思うに、皇室は万世一系であり、士や丈夫は代々禄を受けその地位を受け継いでいる。君主は人民を養い、その業を継ぎ、

臣民は君主に忠義を尽くし、それによって父の志を継いでいる。君臣一体、忠孝一致、これはわが国だけの特色である、と。

松陰にとってはあくまでも「天下は一人の天下なり」であった。松陰曰く、「天下は一人の天下に非ず」とは、「支那人」の言葉である。「支那」ではそうであろうが、わが神州日本においては断じてそうではない。我が大八洲は皇祖が建国したのであって、万世にその子孫が継承し、天地とともに窮まりがないのであり、他人が分外の望みをいだくべきではないのである。天下は一人の天下であることはまた明らかである。…〈略〉、不幸にして天子が激怒し、億兆の民をことごとく殺してしまうときは、四方の残りの民もまた生き残ることはない。そして神州は滅ぶのである。もしなお一人でも民が生存しているなら、天子の宮殿の前に行って死ぬだけである。これが神州の民である。…〈略〉、このときにあたって湯王や武王のような者が現れ、放伐の拳に出るのは、その心は仁であっても、その行為は義であっても、「支那人」でなければインド人、ヨーロッパ人でなければアメリカ人であって、決して神州人ではない。…〈略〉、この天地のあまねく続くところの下にある人民はみな天下のことをもってその任務とし、死をつくして天子に仕え、貴賤尊卑をもって区別しないのである。これが神州の道である。[全集〈第四巻〉pp. 139-140]

かくして松陰は「およそ国勢を論ずる者は、古くは神功皇后、下って豊臣秀吉をあげることでよい」[同上]とし、国難打開の道を探るための歴史的教訓として朝鮮との関係を中心とした記紀に依拠する「古代史」を詳しく述べる [全集〈第一巻〉pp. 355-369]。これは古事記、日本書紀の中の神話的言説を根拠として朝鮮に対する「歴史観」、すなわち架空

③ 吉田松陰の考える草莽は、郷土、浪人、屋庄などの豪農、豪商出身で神州のために一身を顧みず働こうとする意識をもった人々であると考えられる。すなわち圧倒的多数の小作農民、庶民などの大衆ではなかった。

の神話的人物である神功皇后による三韓征伐によって朝鮮は日本に臣属、服属していたとする認識を述べたものである。

ここで松下村塾の門下生齊藤栄蔵が「加藤清正論」の中で、豊臣秀吉が名分のない軍隊を集め動かして無罪の国を討つと論じていることを松陰が批評して書いている文書を見てみよう。松陰曰く、豊臣秀吉は「天縦の才（天才）、目に一丁なくして（無学）、其の為す所、事々習俗の表に出で、神聖の道に暗合せり。夫れ我が神州立国の體は、〈略〉、神功は皇后を以て、倭武（やまとたける）は皇子を以て、皆征伐の任を親らしたまひ、乃ち海外万里に至りて、畏憚したまふ所なし。降つて雄略に至り、馭を邊將に失し、三韓漸く驕る。是より國體日に替れ日に墜つ。古に通ずるの士、誰れか慨然たらざらん。而して豊公は或は未だ深く古史を究めず、〈略〉、而して豊公も亦未だ深く始末を審かにせず、獨り謂へらく『往時明人通市す、而るに今は則ち絶えたり、是れ彼れ我れを軽んずればなり』と。因つて韓に命じて明をして通市すること舊の如くならしめんと欲す。而るに韓吾れに聴かず。是れ韓の罪なり、是れ師の名なり。、〈略〉、近世の頼山陽は卓識の士なり。返つて謂へらく、『征韓は黷武（とくぶ；道理にはずれた戦争をして武徳をけがす）たり』と。吾れ常に其の謂（いわれ）を曉（さと）らず。、〈略〉、抑々山陽に左袒（さたん；同意して肩をもつこと）するか。且つ今日天下の勢は、如何なる時ぞや。西夷稱する所の亜細亜なる者は、半ばは其の欧墨の蚕食（さんしょく；カイコが桑の葉を食べるように他国領土などを少しずつ侵略すること）する所となる。而も尚ほ憂ふるを知らず、方且（まさ）に宴安是れ耽り、太閤の拳を以て咎（あやまち）と為す。而して其の神聖の道に合するを知らず。読書の士、固よりかくの如くならんや」と。[全集〈第四卷〉 pp. 137-139]

松陰によれば、豊臣秀吉は無学の天才であり、古代史を研究することなくして、古代の

神州立国の體を実践した。すなわち「神功皇后」や「倭武（やまとたける）皇子」が「三韓」を征伐し海外万里に至ったのと同様の戦をしたのだという。頼山陽という学者はその秀吉の征韓を道理にはずれた戦争だったと云うが、自分（吉田松陰）はそうとは思わない。見てみよ、いまの世界情勢がどうなっているか。西欧が云うアジアは半ば欧米の侵略を受けているのではないか。しかもアジアはそのことを憂えることもないのだ。豊臣秀吉の行ったことを過ちだったとするのは、日本古来からの国体の道を知らないからだ。読書人（頼山陽）は所詮このような見識しかもたないのだ、と批判している。このように松陰の考え方には古事記、日本書紀に基づく「朝鮮観」、すなわち「神功皇后」の「三韓征伐」などによって古来から朝鮮半島は日本の属国だったという史観が根強くあった。だから欧米諸国がアジアを侵略している状況では豊臣秀吉の様な行動はむしろ国体に則ったものだと主張しているのだろう。

彼によれば「原と天朝に服属」していた朝鮮が「今徳川氏と敵国（対等国）の礼を用ふる」ことができるのは「蓋し上に天朝あるを以てのみ」であり、天皇から与えられた「征夷府の官位を揚」げて君臣関係を明示しなければ、「名正しくして義著」らかとはならない。この点を明確にしないから日本の優越性が曖昧になり「来りて徳川氏の為に襲職を賀するも、而も未だ嘗て天朝の為に登極を賀せず」というあるまじき事態が起きるのである。朝鮮との国交が対等であるかに見えるのは国体が損なわれた結果であり、国体に基づく外交体制が回復されるなら、朝鮮の日本への臣属は明らかになるはずだと、松陰は考えた。[全集〈第十二卷〉 pp. 87-91]

このようにして松陰は危機の対応策の一環にアジア・朝鮮侵略構想を立てた。それが神功皇后や豊臣秀吉の様な「神聖の道」にふさわしく「皇道」を明らかにし、「立国の体」

に合致すると考えた。とくに朝鮮は日本国家の本来あるべき姿として日本に統合されねばならないと考えていた。「外征論」[「丙辰幽室文稿」全集(第四卷)pp. 197-201]において、「夫れ坤輿の形勢は、合せざる能はざる者あり、合はせざるべからざる者あり。我が奥越の如きは地脈接続し、合せざる能はざる者なり。三韓・任那の諸蕃は、地脈接続せずと雖も、而も形勢対峙し、吾れ往かずんば則ち彼れ必ず来り、吾れ攻めずんば則ち彼れ必ず襲ひ、將に不測の憂を醸さんとす。是れ合はせざるべからざる者なり。然れども合せざる能はざる者も、合はせずんば則ち合せず、合はせざるべからざる者も、之れを合はせば必ず合す」として日本は朝鮮を併合しなければならないと主張する。

ところで、すでに見て来たように中華尊宗の風潮への批判からする日本優越主義は、概して万世一系の天皇が存在するところに日本の優越性の根拠を求め、それと不可分のかたちで朝鮮蔑視の傾向を伴っていた。外圧が意識されるようになると、それへの反発から海外雄飛の構想が唱えられ、それが日本優越、朝鮮蔑視の傾向と結びつけて捉えられる。

松陰は書簡のなかで次のように書いている。「今大いに船艦を打造し北は蝦夷を収め西は朝鮮を服し、駭々然として進取の勢を示し候はば、群夷自から手を取むべし。何となれば縦令一度近づき少利を得るとも、又其の本国を襲はれん事を恐るるなり。計此れに出でずんば永久を保するの策に非ず」[安政元年12月12日付書簡]と書き、さらに「朝鮮を来たし(朝貢に来させる)満洲を収めんと欲すれば則ち艦に非ずんば不可なり。是れ余の本志なり。今は未だここに及ばず、則ち巨艦待つべきなり」[全集(第二卷)、p. 281]とあからさまに明言する。松陰は、外圧を回避するために国力を高め軍の洋式化をすすめ、軍艦を作り北は蝦夷地から西は朝鮮を速やかに侵略

征服すれば、外圧列強は恐れて手を引くと言ふ。朝鮮を入貢させ満洲を獲得しようとするれば、軍事力の行使以外にはない。これが私(松陰)の本音であり志であるのだという。朝鮮は軍事力を背景とする侵略的な開国策の対象であった。

それを示す一例として松陰が桂小五郎(木戸孝允)に宛てた手紙を見てみよう。松陰は其中で、長州藩の医者興膳昌蔵という人物の「竹島」開墾論を紹介している。「此の段幕許を得、蝦夷同様に相成り候はば、異時明末の鄭成功の功も成るべくかと思はれ候。此の深意は扱て置き、幕吏変通の儀、興利の説今日の急に候へば、竹島開墾位は難事に非ざるべし。是れ一御勘定の主張にて行はれ申すべくと黙算仕候。委細玄瑞存知の事に付き御運壽下さるべく候。天下無事ならば幕府の一利、事あらば遠略の下手は吾が藩(長州)よりは朝鮮、満洲に臨むに若くはなし。朝鮮、満洲に臨まんとならば竹島は第一の足留なり。遠く思ひ近く謀るに、是今日の一奇策と覚え候」と[全集(第九卷)、pp. 15-16]。すなわち長州藩が竹島(鬱陵島)に手を下して、朝鮮・満洲への足がかりとすべきであるという。これが遠国を攻め取るはかりごとの「一奇策」であるという。

5. おわりに

吉田松陰の生きた時代は幕藩体制にとって内憂外患に脅かされていた時代だった。国内では農民大衆による大規模一揆が頻発し、対外的には列強資本主義がインドから中国を経て日本に迫っていた。この幕末期、開港の頃、朝鮮侵略を唱える者が少なからずいた。在野のみならず、幕府においても対馬藩からの「嘆願書」を取り上げ、ロシア、フランスよりも先に朝鮮を征服しようと考え、その準備に着手していた[沈; 荒野]。ここで幕藩支配層

のみならず、在野の教養人の朝鮮観について歴史を遡って徳川時代初期から見ていった。

秀吉による朝鮮侵略の後に国交回復して間もなく、幕府は朝鮮を朝貢国として想定した。この時期の学者、たとえば山鹿素行などは朝鮮との対比において日本優越論を展開し、「日本書紀」などの古典的歴史書に基づいた「万世一系の天皇」制による「朝鮮服属」を力説した。こうした朝鮮観は、新井白石、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤、佐藤信淵、橋本左内などにも継承され、日本思想史に伏流として流れていた。これが幕末期において強く前面に浮上し時代の「潮流」になった。

吉田松陰はそうした「潮流」を一身に受けて取りこんでいった。彼は日本が欧米列強に取り囲まれ、危機的状況にあることを認識する。書物や伝聞などの情報によって日本を取りまく状況の「現実」を捉えようと努める一方で、松陰は幕藩体制の直面する内憂外患に対処するため、すなわち列強による民衆への懐柔を防ぎ、国民統合を実現し強固にしていく為に、尊王に基づく攘夷論を展開した。夷狄に対する「中華日本」の絶対主義体制を強化するため、天皇の存在意義が強調され、「日本書紀」などの歴史書が回顧される。

かくして松陰は、危機の対応策としてアジア・朝鮮侵略構想を立て、それを正当化する道として「神功三韓征伐」や「豊臣秀吉の偉業」などのような「神聖の道」にふさわしい「皇道」を明らかにしようとしたのである。

以上が本論で論じられてきたことである。ここで最後に「歴史的継承」と「状況対処」とを関連付けて筆者の考えを整理しておきたい。古代朝廷の自己主張として書かれた「日本書紀」によって「万世一系」の天皇制、すなわち国体論が歴史的に展開されてきた。徳川時代において、国体論は日本優越観と朝鮮蔑視観との表裏一体的関係において解釈され

てきた。これは日本歴史の伏流せる朝鮮観を再生産したものであった。その様な思想的伏流の上に、欧米列強の外圧が押し掛かってきた。吉田松陰のみならず幕末の教養人層の間では、この外圧への深刻な危機感や反発から、統合のシンボルとして国体論が浮上してきた。まさに状況への対処の模索において、歴史的に継承されてきた日本優越観・朝鮮蔑視観が合目的的に使われていった。したがって吉田をはじめとする教養人たちは海外への「雄略」を「天下万世継ぐべきの業」とすることを「本志」とし、一丸となって「古時」の朝鮮侵略による盛強回復を目指したのである。言い換えれば、状況への対処として雄略論が選り採られていったのは、伝統的朝鮮観を思想的に支えた国体論の存在が大きかったといえよう。このような富国強兵策が、吉田松陰没後、ロシアやフランスよりも先に朝鮮を服属させようとする幕府の「征韓の準備」や、明治新政府のアジア外交に継承されていったのであった^④。

<文献・史資料>

- ・ 荒野泰典、1983「日本の鎖国と対外意識」歴史学研究会編『東アジア世界の再編と民衆意識』歴史学研究別冊特集、青木書店。
- ・ 尾藤正英・島崎隆夫（校注）、1977『日本思想大系 45、安藤昌益 佐藤信淵』岩波書店。文中では「日本思想大系 45」と示す。
- ・ Boyd Cable, 1937, A Hundred Year History of the P. & O. 1837 ~ 1937, London: Watson and Viney Ltd.
- ・ 張惟綜、2006「吉田松陰の実践的思想」筑波大学哲学・思想学会『哲学・思想論叢』第 24 号。
- ・ 張惟綜、2008「水戸学と吉田松陰」筑波大学哲学・思想学会『哲学・思想論叢』第 26 号。
- ・ 藤田省三、1982『精神史的考察』平凡社。
- ・ 藤田雄二、2001『アジアにおける文明の対抗；

④ 詳しくは沈箕載論文、荒野泰典論文、および金光男論文（2011）を参照されたい。

- 攘夷論と守旧論に関する日本、朝鮮、中国の比較研究』御茶の水書房。
- ・旗田巍、1965「日本人の朝鮮観」アジア・アフリカ講座『日本と朝鮮』第3巻、勁草書房。
 - ・廣瀬豊(編纂)、1940『山鹿素行全集〈思想篇〉』第十二巻、岩波書店。文中では〔書名〕で示す。
 - ・今津健治、1972「九州における近代産業の成立」福岡ユネスコ協会編『日本近代化と九州』平凡社。
 - ・井上清、1974「国家統一の願望；吉田松陰の民族意識」『現代の眼』一月号。
 - ・井上清、1975『新版 日本の軍国主義Ⅱ』現代評論社。
 - ・石井孝、1982『明治初期の日本と東アジア』有隣堂。
 - ・巖本善治(編)、1907『海舟日誌』清水書店、明治40年。文中では〔書名〕で示す。
 - ・姜徳相、1983「日本の朝鮮支配と民衆意識」歴史学研究会編『東アジア世界の再編と民衆意識』歴史学研究別冊特集、青木書店。
 - ・金光男、2008「幕末九州の石炭開発に関する一考察」『ユーラシア研究、The Journal of Eurasian Studies』第5巻第3号。
 - ・金光男、2011「明治初期日本のアジア外交について」『ユーラシア研究、The Journal of Eurasian Studies』第8巻第4号。
 - ・木村直也、1993a「幕末の日朝関係と征韓論」歴史学協会編『歴史評論』No.516(1993.4.)、校倉書房。
 - ・木村直也、1993b「幕末における日朝関係の転回」歴史学研究会編『歴史学研究』No.651、増刊号(1993.10.)、青木書店。
 - ・木村直也、1995「幕末期の朝鮮進出論とその政策化」歴史学研究会編『歴史学研究』No.679(1995.12.)、青木書店。
 - ・桐原健真、2009『吉田松陰の思想と行動：幕末日本における自他認識の転回』東北大学出版会。
 - ・久保田芳太郎、1971「吉田松陰と橋本左内」『国文学：解釈と鑑賞；維新前後の思想と文学』12号。
 - ・栗田尚弥、1984「吉田松陰の対アジア観—松陰は果して「侵略」論者か—」政治経済史学会日古史塾編『政治経済史学』第210号。
 - ・玖村敏雄・村上敏治校註、1965『吉田松陰・山鹿素行集』玉川大学出版部、昭和40年。文中では〔書名〕で示す。
 - ・松本三之介、1973『日本の名著31 吉田松陰』中央公論社。
 - ・松浦玲、1980「幕末期の対朝鮮論」『歴史公論』57号。
 - ・森田吉彦、2004「吉田松陰の対外戦略論—近代日本外交論の一原型(一)—」『社会システム研究』第7号。
 - ・文部省、1933『日本書紀精粹』(日本思想叢書第九編)文部省社会教育局。
 - ・永井秀夫、1990『明治国家形成期の外政と内政』北海道大学図書刊行会。
 - ・奈良本辰也、1951『吉田松陰』岩波新書。
 - ・オールコック(山口光湖訳)、1962『大君の都』〈下〉、岩波書店。文中では〔書名〕で示す。
 - ・蠟山芳郎、1966「植民地独立の時代と日本」遠山茂樹ほか編『歴史像再編成の課題』お茶の水書房。
 - ・沈箕載、1994「幕末期の幕府の朝鮮政策と機構の変化」史学研究会『史林』第77巻第2号、京都大学文学部内。
 - ・杉山伸也、1978「幕末、明治初期における石炭輸出の動向と上海石炭市場」『社会経済史学』Vol. 43、No.6。
 - ・田中彰、1965『幕末の藩政改革』塙書房。
 - ・田中彰、1991『松陰と女囚と明治維新』日本放送出版協会。
 - ・田中彰、1996『幕末維新史の研究』吉川弘文館。
 - ・田代和生、1983『書き替えられた国書』中公新書。
 - ・徳富蘇峰、1893初版「吉田松陰」隅谷三喜男(責任編集)『日本の名著40 徳富蘇峰・山路愛山』中央公論社、1971年。
 - ・遠山茂樹、1962「明治初年の外交意識」『横浜市立大学論叢』人文科学系列、第13巻、2・3合併号。
 - ・遠山茂樹、1968『明治維新と現代』岩波新書。
 - ・海原徹、1990『吉田松陰と松下村塾』ミネルヴァ書房。
 - ・渡辺美好(編)、1996『人物書誌大系34 吉田松陰』日外アソシエーツ。
 - ・山田昭次、1994「民族的差別と蔑視」浅田喬二編『「帝国」日本とアジア』吉川弘文館。
 - ・山口県教育会(編)、2001『吉田松陰全集〈第一巻～第十二巻〉』マツノ書店、平成13年。文中では〔全集〈巻号〉〕で示す。なお、本論

では吉田松陰の述作、手紙類を取めた全集は、すべてこのマツノ書店版を用いた。

- ・山本饒（編校）、1943『林子平全集 第一巻』生活社。文中では「書名」とする。
- ・矢沢康祐、1969「江戸時代における日本人の朝鮮観について」朝鮮史研究会『朝鮮史研究会論文集』第6巻。

・吉野誠、1988「吉田松陰と朝鮮」『朝鮮学報』第二百二十八輯、朝鮮学会。

・吉野誠、2002『明治維新と征韓論』明石書店。

(キム・クァンナム 本学部教授)